



#07

まるちふらいす!



著：藍澤たすく  
イラスト：かもめ遊羽

ピンポーン。

おれ　　おーい、結花、早くしろよー。学校遅れちまうぞー

俺はいつものようになんとなく駄菴家の呼び鈴を鳴らす。寝坊の結花を俺が迎えに行くのは中学の時からはずつとだから、もう4年目になる。

ピンポン。

「おーい、まだ寝てんじやねーだろうなー」

うなく高校に入ったら ちことは生活態度改まるかと思つたら全然たぬ もう今日はさあ  
行つまおうか。

なんだ!?

悲鳴たよな今のかも紅花の声ではかうたよな……

勢いよく玄関のドアが開け放たれ、結花が飛び出してきた。

「京介、どうしよう！ あたし増えちゃつた！」

2人の結婚は本立に困った顔をして継るような目で俺を見つめていた。

「ごめん、もつかい説明してくれる？」

لـ؟

ダブル結花がお互いを指さして俺に訴える。……意味がわからねえ。  
うつた  
うんべき

顔は瓜づたししゃべり方も仕草も2人とも完璧におんなじだ。幼なじみ歴13年の俺でもまつたく見分けがつかないレベル。まるで鏡に映したようにそつくりだ。

どちらも自分が本物だと言つて譲らない。拳句の果てに、一人は冬服、もう一人は夏服で、  
諸こ登校してきやがつた。

絶に登校してきやがった  
どっちがどっちを着るか、じやんけんで決めようとしたが、あいこばかりでまつたく勝負が

つかないので最終的にあみだくじで決めたそうだ。心底どうでもいい情報だ。

るつて事自体が大問題なわけだが！

ちなみに結花のおばさんは「あら、可愛い結花が2人に増えるなんてお母さん嬉しいわ～」  
ま～と、うわ～と喜んでいた。

「ねえねえ、京介。京介ならわかるでしょ、どっちがあたしかって」

「なに厚かましいこと言つてんの！　このニセモノ！　あたしの方が本物に決まつてゐるでしょ、

ねえ京介!?

「あたしが本物だよねー、ねー、京介つてばー」「ねーねーねー、ねーつてばー、あたしの方だよねー、ねー、ねーつてばー」

うん

（かもダブルで来ると単純2倍）やな」と

「うーん、まつこ、十七二丁二ーーー」  
「うーん、まつこ、十七二丁二ーーー」  
知りた、もなかたけど。

夏服結花が俺の腕にしがみついて強引に引っ張つてこうとする。

ぐ。ぎゅー。ぎゅー。

おい、離れよ。坐たでんぞ……おいって!!

え？ なになに？ なにが当たってるの？ な・に・が・当・たつ・て・いるのかなー！」

えけど。び、微妙に気持ちいいじやねえか、このやろう……。

一一一

背後から強烈な視線を感じたので振り向いてみると、冬服結花がこれでもかというジト目で俺を睨んでいる。

な、なんだよ、俺は別に何にもしてねえじやん！ 夏服結花が勝手にはしゃいでるだけだ

「いやらしい……」

何よ。うらやましかつたらあんたもやればいいじゃない?  
「あたしは……！」そんなうらやましくなんか……ないもん……

夏結花が挑発するようにそう言うと、冬結花はうつむいて黙つてしまつた。

「…………知らない！ あたしもう先行つてるから！」

俺の制止も聞かず、冬結花はそ

「あーっははははははー！ いい気味だわ！ ニセモノのくせにあたしの京介をとろうとするから、そやつて尻尾<sup>しほ</sup>まいて逃げるハメになるのよ！」

夏結花が勝ち誇ったかのような高笑いをあげる。目に宿るのは明らかにSの気色。

……あれ、こいつ、こんな性格だつたつけ……？

「ふーん。改めてみるとこれはまた変わったエロゲーですね。さしづめ『ドキッ！ おさなじみで両手に花、塗れ手に粟でおっぱいおっぱい！』ってどこでしようか」

昼休み。

前の席から振り返った橘蕙子が俺を見てそう言つた。

俺はがつくりと肩を落とす。

冬花（もう面倒だから冬花、夏花と呼ぶことにした）はいつもの結花の席についているのだ

が、夏花は机がない、ということで俺の隣にわざわざ席を持ってきてぴったりと密着している。昼休みになる今まで、俺がトイレに行つたとき以外は片時も離れやしねえ。

ちなみに「結花が増えた！」という話題は2時間目にピーカクを迎えたあと、徐々に収束の気配を見せ、昼休みの今はクラス中、腫れ物を触るようにこちらを伺つてゐるだけ、という状況だ。超いたたまれねえ。

「橘、お前の目にはこれが『両手に花』に見えるのか？ お前のメガネの奥にあるふたつのそれはふしづか？」

「あら、愛しい人が2人になつたんだから幸せも2倍でしよう？ 何か問題あるのかしら？」

「結花のおばさんみたいな事言つてんじやねーよ！ てか誰が『愛しい人』だよ!?」

「あら違うの？ あたしはずつとそういう認識で見てたけど？」

「ちげーよ！」

「違わなくないよ！ ねー、ダーリン♥」

「暑苦しい！ 離れるよ、お前！」

猫のようすり寄つてくる夏花を強引に引きはがす。

「んもう、そんなに照れなくていいじゃない。はい、一緒にお弁当食べよ♪」

「え？」

いつの間にか目の前に見事なお重<sup>じゅう</sup>が展開されている。唐揚<sup>からあげ</sup>に玉子焼きにおいなりさん

ウサギりんごにタコさんワインナーに……まるで花見か運動会かという充実っぷりだ。

「これ、お前が作つたのか？」

「そうだよ～♥」

「あんなに朝どたばたしてたのによく弁当なんか作る暇<sup>ひま</sup>あつたな……しかもこれだけの量……」

「うふふ、愛さえあれば2人はどんな障壁も乗り越えられるんだよつ★」

2人つてなんだよ！ ……というか、夏花またキャラ変わつてねえか？

「あああああ、いいから食べよ食べよ！ 美味しいよ！」

じーーーーー

隣から強烈な視線を感じたのでちらりと視線をやると、やつぱり冬花がこれでもかというジト目で俺を睨んでいる。

「何よ、一個もあげないからね！ 仕切りのバラン1枚ですらあんたには惜しいわ！」

「誰も欲しいなんて言つてないでしょ！」

「だつたらいつも通りさつさと学食行つたら？ あたし達の邪魔しないでくれる？」

「ぐぬぬね……」

俺を挟んで夏花と冬花が火花を散らして睨み合つてている。

たぶん世界で一番いやなシンメトリード。

「ほら、京介、早く学食行こ！ A定売り切れちやうよ！」

冬花が俺の腕をとつて強引に連れていこうとする。

「ちょっと、その手離しなさいよ！」

夏花もすかさず反対の腕をとつて引っ張る。

ああ、これあれだ。

三角関係ラブコメなんかでよく見る大岡裁き状態おおおかさばだ。まさか自分が体験する羽目になるとは

思つてもみなかつたぜ。

俺を心配して先に手を放した方が眞の恋人……つて展開はなさそうだな。2人ともマジ睨み合つてんもんな。

「いい加減に放しなさい！ 京介はここであたしの『愛妻弁当』を食べることに決まつてるんだから！」

「愛さ……！？ なんですつて!?」

「愛・妻・弁・当よ。京介のために愛を込めて作つたんだから当然ぞうなるわ！」

「ふん！ 京介はどうするの!? こんな奴のお弁当なんか食べないよね!? いつも通りあたしと学食行くよね!?」

「あ……う……」

夏花と冬花の強力な視線の矢に刺されまくつて俺は言葉に詰まる。

張りつめた静寂の中で、1秒が1分にも10分にも感じられる。

なんですか、これ……針のむしろつてやつですか……？

「うーん……まあ、せつかく作つてくれたんだし、悪いから今日は弁当の方もらうわ」

冬花が息を呑んだまま硬直する。

夏花が勝ち誇つたような微笑を浮かべる。

さすがにあれだつたかな……。でも他にどうしろつて言うんだよ。

「そうだ、結花、お前も一緒に食べれば」「知らない！」

俺が言い終わらないうちに冬花は脱兎の如く、教室から走り去ってしまった。あちゃー。「さすがに最後の一言はデリカシーがなかつたんじやないかしら、京介くん？」

「う、うるせえ……」

橘のツッコミに弱気で反論しつつも、納得せざるを得ない。

なんだよ、この無理ゲー、どこが真ルートだよ……。

「さささつ、はい、京介あーん♪」

「や、やめろよ、一人で食えるつて」

唐揚げをお箸で摘んで差し出す夏花はめちゃめちゃ幸せそうだ。くそ、人の気も知らねえ

で……。ちやちやつと食べて早く冬花のフォローに……ん？

「美味しい……」

「でしょーー！ 結花、超頑張ったんだから」

その辺のファミレスで食うよりも断然美味しい唐揚げだった。他の玉子焼きも、フライも、おひたしでさえも、めちゃめちゃ美味しい。気がつけば俺は夢中でがつついでいた。

が。

「おい、結花、お前……」

「ん？ なあーに、京介くうん♥」

「お前……左利きだったつけ？」

幸せそうな笑みを浮かべていた夏花の表情が一瞬凍り、箸を持っていた左手をあわてて背中の後ろに隠す。そしてすぐにどこか寂しげな色が瞳に浮かんだ。

「そつか、気づいたんだ」

「結花、お前……!?」

目の前の夏花に異変が起きた。透けている。

夏花の向こうの景色が、まるで彼女という摺りガラスを通してぼんやり透けて見えるような……。

これは……夏花が消え始めている！？

「ごめん、あたし不器用だから上手くできなかつたかも、だけど……」

「おい……」

「あたしが消えても忘れないでね。夏花の想いは冬花の想いでもあるつてこと。結花の気持ち、

判つてあげてね……」

「おい、夏花!?」

俺が差し出した手はただ虚空をつかんだだけだった。

II

夏花は空気に溶けるように、完全に消えてしまった。

「うーん、そーカ、見破られると消えちゃうのか。あたしの術式もまだまだね  
【あぜん】とする俺の耳朶を、薰子の不可解な言詞が打った。

「お前……何か知ってるのか？」

「ふふふ、あたしはちょっと『恋を応援する魔法』を結花にかけてあげただけよ？」

「どういうことだよ!?」

「好きな人の前で素直になれない、好きなのに好きといえない……そんな自分じゃなくて、もつと好きってストレートに言える自分になれるようについて」

「それが、夏花だつたつてことか？」

「本当は結花自身がそうなるはずだつたんだけど、きっと朝、鏡を見たときに魔法の効果が出てしまつたのね。『鏡の向こうの自分』に対して」

だから左右反転してたつてわけか……でももしそれが本当なら結花は俺の」と……。

「ちよつと行つてくる！」

俺は夢中で駆けだした。

早く、早く結花を捜さないと！」

「はあ～うらやましいわ～、青春だわ～」

俺の後ろで溜め息混じりの橘の声が聞こえたような気がした。

「あたしだめだ、本当にだめだ……」

「旧校舎裏にある手洗い場に一人佇んだあたしは、心底そう思った。

蛇口をひねって、流れ出す水に頭を突っ込む。

涙でぐちやぐちやの顔を誰にも見られなくなつたから。

特に、京介には。

「あたしがこんなんだから、あんなニセモノに、あんな簡単に京介をとられちゃうんだ……」  
顔をあげたびしょ濡れのあたしは、鏡の向こうで泣き笑いのような表情を浮かべていた。  
これは誰？

あたしこんな顔してないよ？」

「あたしが……もつともつと綺麗で……もつともつと魅力的で……そうだ、京介が好きなRK  
Bのセンターの娘ぐらゐ素敵だつたら……」

「やめろ、結花！ それ以上願うな！」

「え？ 京介？」

昇降口から走つてくる京介の姿を確認した瞬間、目の前の鏡から眩いばかりの光条がほとばしつた。

「なに、これ……」

そして鏡の中から極彩色にいろどられたドレスを着た「あたし」が飛び出してくる。手にはマイクを持ち、バックには何故かダンサーを従えて……。

「やつほー！ アイドルの結花爆誕<sup>夏花デビュー</sup>だよー！ 今日は京介くんのためだけに歌いまあーす！」

どこからか放たれた七色の光がアイドル結花を照らし、大音量のビートに乗せて彼女は歌いだした。

恥ずかしくなるほどストレートなラブソングだった。

京介と結花の<sup>おだ</sup>穏やかな日常が戻つてくるのは、まだよつと先の話になりそうだ。

おしまい